週刊 愛知民報
2023年 5月21日 第2633号

発行所 日本共産党愛知県委員会
〒460-0007　名古屋市中区新栄三丁目12番25号
☎(052) 261-3461（代表）
(052) 251-2925（編集部）　FAX(052) 261-6063
定価　月　400円　郵送料336円　1部　100円
毎週日曜日発行（第5日曜日は休刊）

名古屋でデモ

ドクター・ナース 介護ウェーブ

国や地方自治体に対して安心の医療・介護を求める県民運動が粘りづよく取り組まれています。医療関係者・当事者の「なまの声」を集める努力がおこなわれています。5月8日には新型コロナウイルス感染症が「5類化」されましたが現場には感染対策が求められています。愛知県医療介護福祉労働組合連合会や愛知県民主医療機関連合会などは13日、名古屋市栄の繁華街で待遇改善を求めるデモをおこないました。

「看護師、介護職員を増やせ」と白衣のデモ行進をする人たち＝13日、名古屋市

看護職員労働実態調査

「やめたい」背景に人員不足

愛知県医療介護福祉労働組合連合会（愛知県医労連）は「看護の日」の12日、愛知県内で働く看護職員の労働実態調査の結果を公表しました。同調査は、愛知県医労連の上部団体・日本医労連が1988年以降、5年に1度実施しているもの。愛知県では24病院から4981人分の回答を得ました。

「仕事を辞めたいと思う」と答えた看護職員は「いつも思う」「ときどき思う」をあわせて全体の79・8％。2017年調査の73・2％より上昇しています。「仕事をやめたい理由（3つまで）」の設問では、「人手不足で仕事がきつい」58・8％が一番多く、次いで「賃金が安い」41・3％、「思うように休暇が取れない」34・4％、「夜勤がつらい」25・3％でした。

「疲れが翌日に残ることが多い」、「休日でも回復せず、いつも疲れている」を合わせたいわゆる「慢性疲労」は75％で過去数回の調査で最高。うち、勤務形態別では「日勤のみ」68％に対して「3交替」が79・1％、「日勤と準夜勤」81・8％となり、夜勤者が慢性疲労を訴える傾向がありました。

「健康に不安」「大変不安」「病気がちで健康とは言えない」をあわせて59・4％が健康不安を抱えていました。「最近の自覚症状」では、「全身がだるい」51％、「腰痛」45・7％、「目が疲れる」44・5％、「いつも眠い」43・5％が上位でした。「切迫流産」「流産」は合計29・7％ですが、妊娠時の夜勤・当直免除は4割未満でした。

県医労連は、「看護職員は慢性的な人員不足のなか、長時間過密労働、夜勤労働で健康を害しながら働いている。医療ミスに直結しかねない」と強調。

国に対し、労働時間規制の充実、県に対しては、看護師修学資金貸付制度の復活・拡充など抜本的支援を求めています。

安心の医療で命と健康守ろう

関係者・当事者が切実な声

75歳以上窓口2割化

受診控えの実態浮き彫り

昨年10月から75歳以上が加入する後期高齢者医療保険で、一定以上の所得の者の医療費窓口負担が「1割」から「2割」に引き上げられました。単身で年金収入200万円以上の者などが対象。

愛知県保険医協会は4月19日、同会が加盟する全国保険医団体連合会が昨年11月から今年3月まで実施した「安心して暮らしたい！医療・介護の今後はどうなる?」のアンケートキャンペーンの受診・生活実態調査の集計結果を公表しました。全国で1万8000通の返信があり、うち愛知県分は1278通でした。

コロナ禍や物価高騰、年金引き下げなどによる生活苦と経済的理由による医療機関への受診控えが浮き彫りになりました。

「受診や暮らしの様子について」の設問で、一番多かったのは「貯えの切り崩し」249件で、「受診回数を減らした」208件、食費などを削っている104件と続きました。

自由記述欄には、医療費の負担や受診を控えた経験、社会保障についての意見が多数寄せられました。一部を紹介します。

「かつて、老人医療費が無料だったころがありましたね。老いるとどうしても受診の機会が増えます。収入はどんどん少なくなり、物価が上がると、長寿であってはいけない世の中ですね」「年金受給が減る中、75歳以上2割化は生活費圧迫につながり受診回数を減らすことにつながりそう」「歯科に行って入れ歯を作ったりすると高い金額になったりします。家計に優しい、誰でも気軽に歯科の治療ができるように」「医療機関に勤めていますが、高齢者の負担がかなり大変そう。施設に入りたくても入れない人が多い」「物価高騰で、多少具合が悪くても病院に行かないで我慢するのが当たり前。自己負担が上がるのは死活問題」。